

## 「子どもに尋ねる」

岐阜大学 土岐邦彦

私が初めて茂木俊彦さんとお会いしたのは、茂木さんが広島から立正大学に異動されてきた1978年のことだった。私が自己紹介すると、茂木さんは「君が土岐くんか」と言われた。行動主義の嵐が吹き荒れていた所属する大学の中で途方に暮れていた私が、たびたび全障研の事務所を訪れていたことを知ってくださっていたのだ。

その時、毎週の全国事務局会議に出席するよう求められ、その後は障害児保育や教育の現場での仕事や、茂木さんが編集された書籍に分担執筆する機会もいただいた。まさに全障研が「私の大学」になるきっかけをつくってくれた恩師である。

\*

茂木さんから学ばせてもらったことは多い。「子どもたちのいる現場に出かけ、もっと一人ひとりに寄り添っていくこと。子どもの発達を知るには、まずは乳幼児とじっくりかかわってみたら」という助言とともに、埼玉県のある二つの市における障害児保育巡回相談の仕事を紹介してくれた。茂木さんがいくつも頼まれる仕事をこなすのが時間的に無理だということで回してくれた仕事であった。私がまだ20代の後半のころのこ

とだ。

ある保育園でのカンファレンスでのこと。私の発言に対し、ひとりの保育士さんが「茂木先生の言われたことと違う」と述べられた。いささか動揺した私は、茂木さんとお会いした時にこの件を持ち出し「先生の意見と違うと言われても、子どもだって発達して変わっているわけだから、先生が見られたときと違っていても当たり前じゃないか」と不満たらたらと訴えた。茂木さんは「僕はほとんど何も言わないよ」と、ただ笑っておられるだけだった。もちろん何も言わないということはないのだろうが、後になって気づかされた。「自分のちゃちな枠組みに縛られた発言の不十分さを、あの保育士さんは見抜いていたんだらうな…」と。ここに至るまでにずいぶん時間がかかったけれど。

\*

茂木さんはストレートに言われえない（時々ストレートに叱られもしたが）。ただ、発達「観」をゆたかに養うように、という無言の教えをいただいたと思う。既成の理論をしつかり学ぶとともにそれに縛られず、自分の眼と頭と心を通して子どもたちにかかわり、自分なりの発達



## 茂木俊彦さん

もぎ としひこ / 1942年～2015年。  
東京大学教育学部教育心理学科、同大学院で学び、専門は発達心理学、障害児教育学。広島大学、立正大学、東京都立大学、桜美林大学に勤務し、第11代東京都立大学総長。全国障害者問題研究会全国委員長、民主教育研究所代表運営委員などを歴任。

「論」を構築せよということだったので、いまして思う。

「自らの感受性を高め、想像力に磨きをかけていくことによって、困難を乗り越えて子どものことを分かるようにする。その努力を端的に表現してみると、それは『子どもに尋ねる』ということである。尋ねることによって子どもとつながり、共感関係を深め、子どものことが分かるようになっていく」。茂木さんが晩年強調された「子どもに尋ねる」という「子ども理解」の思想と方法意識である。私にとってストレートに響く言葉である。（ときくにひこ）